

東京の若い教職員の思い -アンケート結果から-

東京教組組織拡大オルガナイザー 谷口 滋

東京教組青年部は、「東京都で働く若い教職員の方々へ」と題するアンケートを実施し、採用1年～4年目の皆さん127名が回答を寄せてくれました。

アンケートから、とても深刻な青年教職員の悩みや職場の状況から、希望とやりがいを持って働く姿までが浮き彫りになりました。

回答してくださった127名の内訳は、小学校92名(72%) 中学校33名(26%) その他2名。新採用が一番多く41名(32%・うち期限付き任用6名)に続き、4年目33名、3年目20名、2年目19名、その他14名、その内、学級担任が77名(61%)でした。

教職に生きがいを感じ、退職まで続けようと考えている青年教職員

最初の質問が「生きがいを持っていますか?」。「そう思う」が68%、「思わない」が5%。

「退職まで続けようと思えますか?」という質問には、「そう思う」が57%、「思わない」が9%という結果でした。

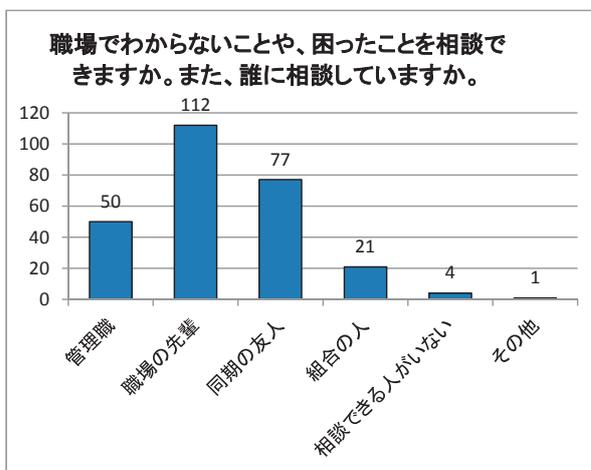
「続けたくても身体がもつか心配です」という不安を訴える方もいましたが、「仕事は『生きがい』ではなく、『やりがい』をもってするものだと思います。仕事を生きがいにしてしまうと、それがうまくいかなかった時に、心を病んだり、自ら命を断ったりしてしまうと思います。生きがいとは、家族と過ごすことだったり、仲間と語り合うことだったり、死ぬ前に一番やっておきたいと思うことじゃないでしょうか。」という意見もありました。教職を人生のすべてと考えるので、「やりがい」のある仕事にしていきたいという思いが伝わってきます。

相談相手は先輩と同期の友人

「職場でわからないことや、困ったことを相談できますか。また、誰に相談していますか。」という質問には、「職場の先輩」が112人。

ほとんどの回答者が相談相手として先輩を頼りにしていることがわかる。次が、「同期の友人」77人で、新採研などで苦労を共にした同期の友人が何でも相談できる相手になっているようです。

「相談できる人がいない」は、4人とわずかですが、とても心配です。特に、養護教員や栄養職員など学校に一人しかいない職種の方が相談相手に苦労しているようです。



働きすぎに注意! ほとんどの人が医師の面接が必要な過労状態。

青年教職員の長時間勤務の実態が、アンケートによって明らかになっています。

なんと、毎日11時間以上勤務の人が77%(月60時間以上の超過勤務)にのぼります。

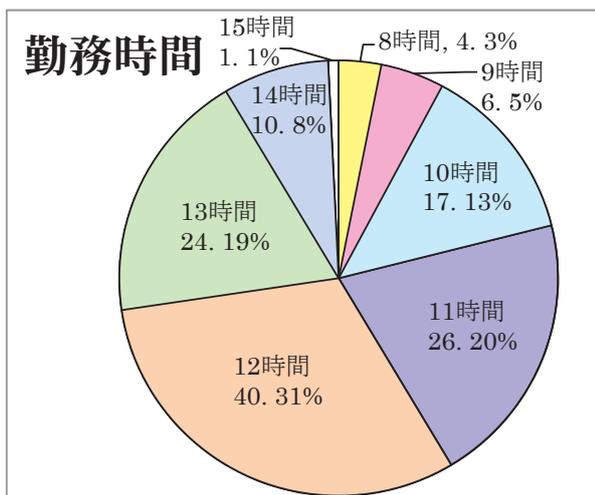
労働安全衛生法に基づき医師による面接指導が必要な月80時間以上の超過勤務の人も56%。

医師による面接指導が義務付けられている月100時間以上の人27%もいる実態がグラフからも分かります。

これは、2007年に文部科学省が全国で実施した勤務実態調査より悪化しています。

今回のアンケート結果では平均勤務時間11時間36分(実際にはとれていない休憩時間を差し引いても超過勤務が3時間6分になります。)

したがって、6年前より1時間以上勤務時間を超過する事態になっていることがわかります。



休日勤務も増えている!

土曜授業がじわじわと増え、月2回以上の休日出勤が6割以上になっています。部活動などで、土日もほとんど出勤という人も1割以上いました。

一方、休日出勤の振替が長期休業中になるため疲れがとれないという訴えも多くありました。

特に青年教職員がお祭りなど地域行事で休日に出勤しなければならないことも多いよう
で負担になっています。

青年教職員は、教材研究・授業方法・保護者への対応に不安を感じている。

「不安や困っていること、疑問に感じることなどがあつたら教えてください。」という

問いのベスト3は、「教材研究」「授業方法」「保護者への対応」で、50人以上4割の人が不安を感じています。

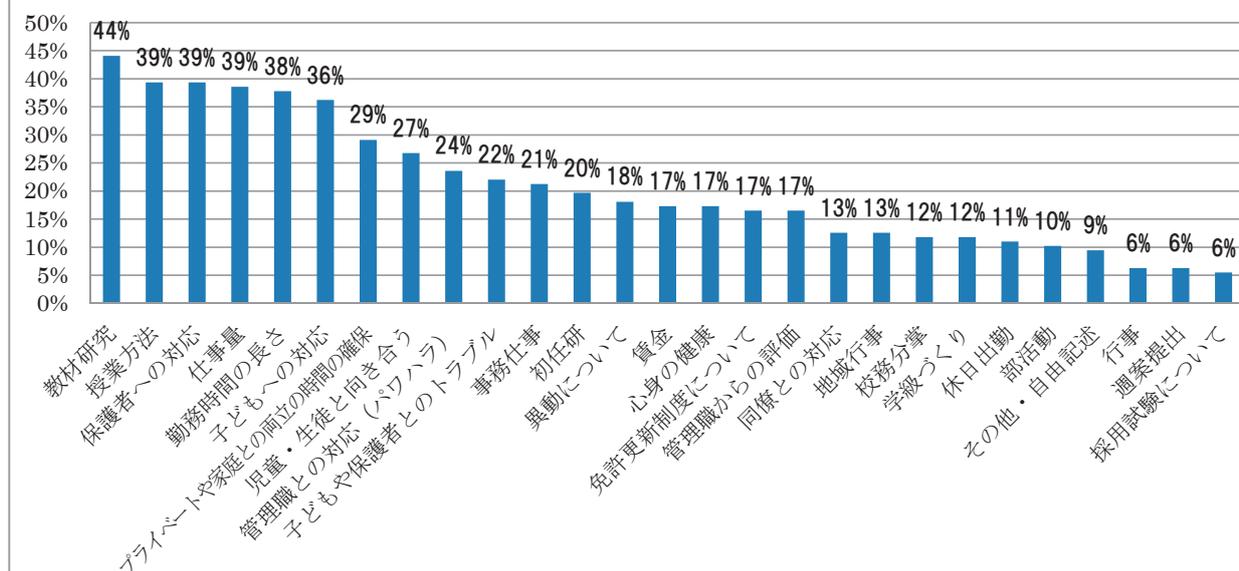
続いて、「仕事量」「勤務時間の長さ」「子どもへの対応」を3割以上、「プライベートや子育てや家庭との両立の時間の確保」「児童・生徒と向き合う時間がほしい」「管理職との対応(パワハラ)」「子どもや保護者とのトラブル」「事務仕事(たより作成・会計・成績処理・種々の調査)」を2割以上の人があげている。

つまり、青年教職員は、①教職員として力をつけたい、②仕事が多すぎる。ゆとりを持ちたいと感じていることがアンケート結果から分かります。

自由記述欄には、具体的な悩みや疑問が寄せられました。その一部を紹介すると、

- ・管理職から6時前に退勤することで早く帰る日が多いと叱責され、仕事量を増やすべき指示された。勤務時間や休憩時間のルールも保証されない労働環境である。
- ・同僚性が解体されていると感じる。
- ・通勤時間(往復5時間20分)、持ち時数(24時間+3時間)のため、勤務や子育て、健康面に支障が出ている。
- ・何度異動しても自宅から勤務先が遠いのが悩み。4:30に起きる生活には正直疲れしました。
- ・管理職の攻撃的な言葉遣いなど恐怖です、人格を否定しているように感じ、今後の職務に不安です。

(5) 不安や困っていること、疑問に感じることなどがあつたら教えてください。



研修の回数・レポートが多い、現場で生かせる内容に！

初任者研修、2、3、4年次研修について、困ったこと、疑問に感じたことなどを記入式で聞きました。一番多かったのは、研修の回数、レポート量が多すぎることに。本務である授業や子どもたちとの関わりを犠牲にしてまで研修に出かけなければならない悩みが多く寄せられました。研究授業も含めて研修内容を実際の授業や仕事に役立つものにしてほしいという意見もたくさん寄せられました。

研修が役に立つという声がある一方で、研究授業等では先輩のベテラン教員の授業こそもっと見てみたいなど、教育活動の力をつけたいと願う若い教職員の姿が浮き彫りにされました。特徴的な記述を紹介します。

健康を害し、授業や子どもたちを犠牲にする研修に疑問！

- ・毎月の研修、レポート、睡眠時間まで削られた初任研。正直これで心を病みました。
 - ・センター研修の後、1週間以内にやたら細かいレポート提出。管理職にOKをもらうのが大変でした。その合間に毎月のように研究授業もあり、普段の授業が手一杯でした。
 - ・初任研受講中にクラスの子が怪我をしたが、研修中を理由に知らせてもらえず、事態を知ったのは初任研終了後だった。それから病院に向かったが、保護者に対応の遅さに対する不信を持たれてしまった。
 - ・宿泊研修でグループによっては深夜2時～3時までやっているところもあった。
- など、研修が本来の教育活動を阻害しているとの指摘が多くありました。

現場で生かせる内容・ベテランの先生の研究授業を見たい

- また、研修内容では、
- ・授業に生かせる研修ではないものがあり、残念、時間がもったいない。
 - ・同期の授業ではなく先輩先生の師範授業をたくさん見たい。
 - ・実務とかけ離れた内容の座学に時間をとられ、内容のなさががっかりする。

- ・校内研で経験豊富な教員が授業をやりたがらず、うんちくを述べることに疑問。
- ・意味のないレポート提出が多い、読まない様なレポートを求めることに疑問。
- ・「困っていること」に、子どもの名前がなかなか覚えられないと書いたら、訂正するよう管理職に言われた。内容を正直に書くことができないと思った。
- ・とにかく量が多い。
- ・レポートで書いたことへの何らかのフィードバックがあればためになると思うのですが。

授業力、仕事のノウハウこそ身につけたい青年教職員！

アンケートで「今、とくに知りたいことはありますか？」【複数回答可】という質問をしてみました。

結果は、次ページのグラフのとおり、「授業方法など仕事のノウハウ」を知りたいと思っている青年教職員が61%と、突出しています。

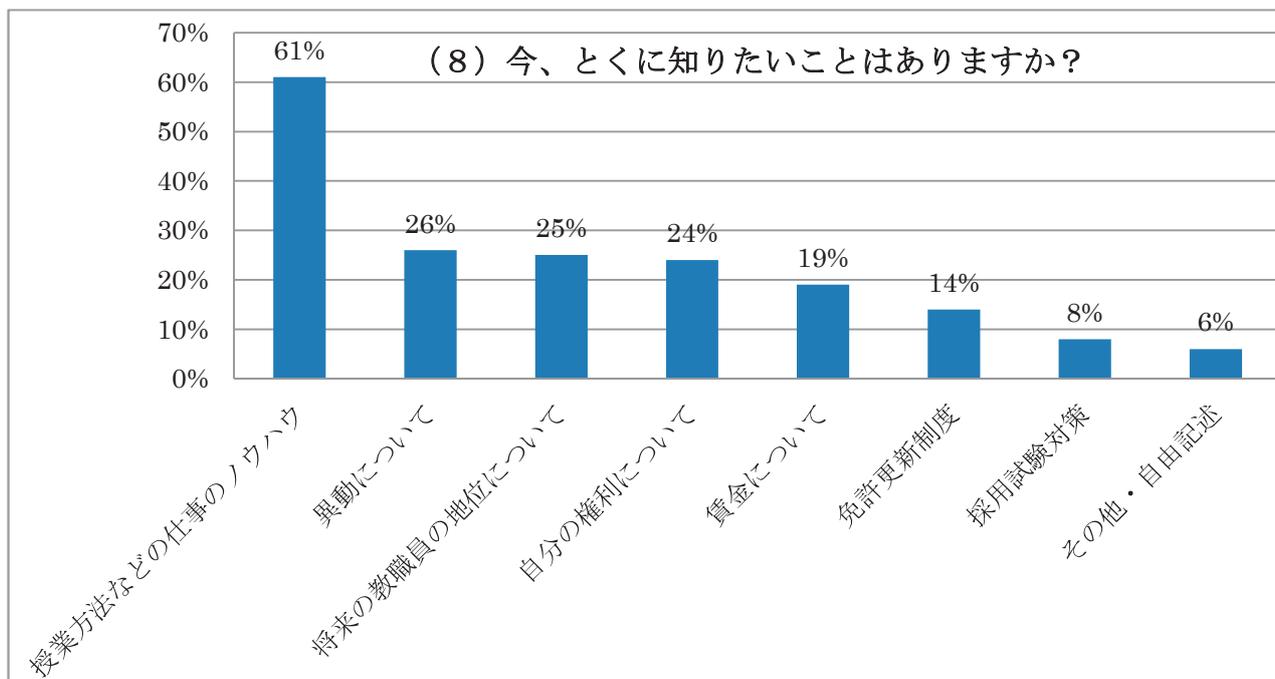
いかに青年教職員が授業や仕事のノウハウを身につけたいと切実に思っているかがわかります。

また、1/4の青年教職員が、「人事異動」「将来の教職員の地位」「自分の権利」について知りたいと考えていることから、職場で若い人に声をかけ、授業や仕事のことで困っていることの相談相手になることが重要です。

- 自由記述欄には、こんな声もありました。
- ・人事考課の評価する人は誰なのか。また、規準（基準）はどうなっているのか。
 - ・くだらない研究が多すぎて、結局ふだんの仕事や肝心の校務などに関することが指導してもらえなかった。初任研や2～4年次研は研究授業が多すぎる。

圧迫面接じゃないか？の声。期限付き採用への疑問！

アンケートは、最後に自由記述で「採用試験・面接・また中途採用などで困ったこと、おかしいと感じたことはありませんか。」と「その他、自由に書いてください。」の欄を設けました。自由記述の欄にもびっしりと職場で困っていること、知りたいことを書いてく



れた人がたくさんいました。

- ・個人面接のとき、試験官が次の人のカードを見ながら、自分に質問をしてきた。質問に答えると、怪訝そうに「カードにはそんなこと書いていない」と言ってきた。別の試験官がカードを間違えていることを伝えてくれて、誤解が解けたが、夢を持って働こうとしている人の人生がかかった面接なのに、とても失礼だと感じこの人下では働きたくないとまで思いました。いい加減さを感じます。
- ・日の丸・君が代についてどう思うか聞かれた。その時は反射的に「違和感はないです」と答えたが、東京はものを言いにくいのかなと思った。
- ・区市町村の面接はあきらかに圧迫面接であった。
- ・面接の結果採用した以上、初めて職場でわからないことがあるのは当然で、それを尋ねたら、無視されるようなことがあっていいのでしょうか。
- ・期限付き制度をやめてほしい。学校で4月に教員紹介で「期限付き教諭〇〇」と校長がよび、生徒もその教員を一段下に見るようになる。
- ・期限付き、産休代替など、使い捨てのように感じる。
- ・期限付き任用で8月に面接を受験したが、不合格だった。何がダメなのか知りたい。普通の教員と同じ、またはそれ以上働いて

いるので、試験勉強の時間がない。それで試験に不合格だと、次の年度でバツサリ切られる。これでは単に東京都の駒になった気分である。もっと期限付きの制度を見直すべきだと考える。

業績評価への不安、管理職の言動への疑問

- ・校長の独断専行が多い。研究推進委員会等の校内委員会への関与で、指示が先になり、検討事項の協議による決定が困難な現状にある。
- ・初任なのに担任を任せられ、残業の多さに苦しんでいたら、「つかれたと言うな」と指導教員に言われました。おまけに、来年度過員になるため、一年で異動だと言われ、もうこの組織にいたくなくなりました。過労により適応障害と抑うつになりましたので、次の3月までに退職します。
- ・管理職が現場の教員を思いやる気持ちに欠けることが一番の問題だと思う。パワハラ発言問題に対し無関心、あいさつもしない、生徒対応への無理解など本当に困ります。
- ・男性の管理職の元で勤務しております。私は、経験者枠で採用され、年齢も少しいつております。多くの場面（飲み会も含め）若い女性の先生方には、とても対応はやさしく、デレデレしているように見え、年齢の少し上の女性の先生方には、その時々で

感情的に、指導という名目の中で、ぶつけているように思われます。

- ・事故が起こった時、結局管理職は守ってくれず、保護者対応など不安があります。ずっと続けると考えるより、日々できることを精一杯やることしかできないような気になることも時々あります。(養護教員)
- ・2・3月に管理職から評価についての公開を求めたときに「なぜ公開を請求するのか」強く問われた。
- ・職員朝会で管理職に質問した同僚があとで校長室に呼ばれて「朝会は質問をする場じゃない」と言われたそうです。
- ・今年度、同時期に2名の先生が病休した。このことに対する校内の体制、管理職の対応に疑問を感じた。児童らは増々荒れ、教員の人数が足りないので補教が組めない現状で、次また誰が倒れてもおかしくない。一般企業ならば傾いていると思うほど、内部の状況は深刻である。
- ・会議が多い。若い人ばかりでベテランが少ない。現場の意見を吸い上げず勝手にいろいろなことが決まっている。
- ・不要な提出書類に振り回されている自分に疲れる。授業の準備がしたいのにできない。

頼りになる先輩、組合

- ・指導教員が自宅へ夜遅く来たり、電話やメールが夜遅く来ることもあり困ったが、組合の方が話してくださり、今はなくなったのでよかったです。
- ・通勤時間が往復5時間20分、定時で帰るたび「もう帰るんだ」と管理職に言われていたが、組合の方が「帰るよ」と言ってくれ、19:30頃には帰れるのでありがたいです。
- ・退職しようと思った時があったが、組合の方に支えられ、続けることができています。(自死を考えたこともあります。)
- ・初めてのことは、わからないことばかりでその度に壁にぶつかりますが、周りの先輩方に助けて頂きながら、毎回何とか乗り越えることができています。年度当初よりは、いろんなことが少しずつわかってきたので、3学期も頑張りたいと思います。
- ・(人事考課で)初年度D判定を受けました。でも早めに組合に相談し、加入とほぼ同じ頃、管理職からパワハラを受けることは少

なくなり、とても感謝しております。次の年も学担として働くことができ、産休に入ることもできました。辞めなくて本当によかったと思っています。

- ・学校のひどさは、管理職とごく一部の先生に起因し、ほとんどの教職員の方々はいろいろと親切に教えてくださるし、私のような若い新米教師を育てようと応援してくださいます。校長の「職務命令は組織では絶対で、黒でも白と言われたら白と言え。」副校長の「3月までやりたかったら言うとおりにしろ。」等の暴言は、未だに信じられません。が真実です。

取れない休暇・育児時間

- ・育児のために労働時間の短縮勤務をしている場合に、補助の栄養職員が付いてくれたら、時間短縮できる制度が使えるようになるのにと多くのことが多い。実際時間短縮制度が使えなくて困っている。
- ・来年度育休をとるが、半年とることにあまり気持ちよく受け入れてもらえず、9月に話したが12月の時点で、了承を得られていない。
- ・4月から育休復帰し、育児と仕事と家事をこなしていかなければならないのがとても不安に感じる。
- ・現在、長期の育休中のため実際の勤務はしていませんが、産休前は子どもがいるということで学担をやらせてもらえませんでした。復帰後は異動するので短時間勤務など利用せず仕事と家庭が両立できるか不安です。

アンケート結果で浮き彫りにされた青年教職員の思いと、その実態は以上のとおりです。採用1年足らずで退職してしまった教職員が79名(2013年度)、精神疾患で休職している教職員が532名(2009年度)という数字が示すとおり、希望を胸に教壇に立った教職員を守りきれなかったという痛恨が私たち教職員組合にもあります。

このアンケートを今後も続ける中で、若い教職員の思いに少しでも寄りそい、力になれる先輩、教職員組合でありたいと願っています。

(東京教組組織拡大オルガナイザー・谷口 滋)